

官民一体のサイクルツーリズム“びわ湖一周”をテーマとした「ピワイチ」の取組み (輪の国びわ湖推進協議会 / 滋賀プラス・サイクル推進協議会)

1. 「ピワイチ」ブランドの立ち上がり

「ピワイチ」とは、自転車やバイクなどで琵琶湖を一周すること(約200km)。もともとは国内の愛好家たちの間で使われていた言葉で、ネット上に登場するようになったのは2001年頃からという。その後、口コミやSNS等によって徐々に広がりを見せていく。

2008年には、地元の市民団体や民間企業が中心となって、びわ湖一周サイクリングを契機とした自転車の日常利用促進を目指した取り組みを開始。

2009年には「輪の国びわ湖推進協議会」を設立。「自転車による環境に調和した社会づくり」を旗印に、「びわ湖一周認定証」の発行、「協賛ショップ制度」「輪学(勉強会)」や書籍の発行など、「ピワイチ」の普及に向けた具体的な活動を行う。

当初は環境やエコの観点から民間主導で始まった「ピワイチ」であるが、2012年になると滋賀県の滋賀交通ビジョンのもと、自転車利用促進組織として官民が主体となり、「滋賀プラス・サイクル推進協議会」が発足。輪の国びわ湖推進協議会や民間企業とも連携し、観光振興の観点からも、「県内外へのPR」「サイクルマップの制作・配布」「サイクルサポートステーション整備」等の具体的な施策を進め、サイクリスト誘致のための活動を行ってきた。

このように、それぞれの立場で互いの強みを活かしつつ連携することで、「ピワイチ」ブランドが本格的に確立。来訪サイクリスト数は年々増え、2015年には5万人、2018年には10万人を超えるまでに成長。今では、台湾など海外からも多くのサイクリストが訪れるほどになっている。

2. 具体的な取組みについて

順調に成長してきたかに見える「ピワイチ」だが、「走りに来るだけで宿泊や食事をしないで帰ってしまう」「観光施設のサイクリストへの理解不足」といった課題があるため、「受け入れ環境の確保・整備」を進めるとともに、周遊観光を推進することを通じて、国内外からの来訪促進をはかり、地域活性化へつなげていくために以下のような取組みを実施している。

◆リピーター確保への取組み

「琵琶湖一周200km」のサイクリングコース上に道の駅や観光スポットなど16カ所のチェックポイントを設け、専用WEBサイトから4カ所以上のクイズに答えて申し込むと「びわ湖一周認定証」と記念ステッカーが贈られる。ステッカーは複数回の周遊でシルバー→ゴールドにランクアップされるといった、サイクリスト心理をくすぐるリピート策を組んでいる。

◆滞在・周遊促進への取組み

滋賀県内の滞在時間を長くするため、琵琶湖一周だけでなく、湖畔から離れた観光スポットを巡るコースも紹介する専用マップ「ピワイチ・プラス」も作成。作成に当たっては、地元のサイクリストと行政職員が自ら自転車でコースを回り、その土地の人のみぞ知る景観スポットやショップなどを発掘し、その魅力を伝えている。

◆地域への啓発活動

サイクリストに「ピワイチ」を楽しんでもらうためには、受け入れ側となる地域における自転車やサイクリストへの理解が不可欠である。そのため、滋賀プラス・サイクル推進協議会が中心となって「サイクルサポートステーション講習会」を開き、啓発活動を行っ

ている。また「ピワイチツアーガイド養成研修会」を開催し、地域に根付くガイドを育成することで、地元ならではの知識・ノウハウ活用の機会を創出している。

◆走行環境整備 / 事故防止への取り組み

環境整備については、自転車用のルートが視認しやすいよう滋賀県など道路管理者により「青色矢羽根（自転車レーン）」（p3.写真①）の整備が行われている。

さらに滋賀プラス・サイクル推進協議会は、サイクリストが休憩しやすい環境づくりや、サイクリストの走行中のトラブル対策として、道の駅・コンビニ・サイクルショップ等の協力を得て、空気入れや工具の貸出しができる「サイクルサポートステーション」（p3.写真②）の設置を行っている。また、車体トラブル時の移動の緊急対応として「自転車まるごとタクシー」（送迎サービス）を導入している。

これらの取組は、県および滋賀プラス・サイクル推進協議会の財源をもとに、協議会自らが地元民間企業へ働きかけ、官民一体となってサイクリストへの支援を行っている。

【主な具体的な取組み・目的/効果・実施主体】

（取材に基づき東京観光財団が作成）

具体的な取組み	目的/効果	実施主体（※）				
		A	B	C	D	E
自転車専用道道路の整備	安全性の確保	○				
サイクルサポートステーションの運営・整備	安全性の確保		○		○	
自転車トラブル時の送迎	安全性の確保				○	
サイクルコースの企画・マップの制作	周遊促進	○	○	○	○	○
サイクリングツアーの開催	周遊促進				○	
ピワイチサイクリングナビ運営	周遊促進		○		○	
協賛ショップ	周遊促進			○		
認定証の発行	周遊促進			○		
ピワイチPR活動	誘客	○	○	○	○	
ピワイチお土産グッズの企画・販売	消費促進		○		○	
サイクルサポートステーション講習会	情報共有・意見交換	○	○		○	○
サイクリングガイドの人材育成	情報共有・交流	○	○		○	○

※実施主体 記号解説 A=行政（滋賀県・市町村） B=滋賀プラス・サイクル推進協議会
C=輪の国びわ湖推進協議会 D=民間事業者 E=地域住民

3. 今後の展開

「ピワイチ」の多面的な価値を高めていくことを目指している。

例えば、専用アプリ「ピワイチサイクリングナビアプリ」の利用者データの活用。GPSの履歴をチェックすることにより、周遊促進やリピーター拡大のための新たなコースづくりを進めている。

また、県外へのブランド認知を高めるため、「三湖連携（霞ヶ浦・浜名湖・琵琶湖）」といった他県のサイクルツーリズム事業とも連携し、広域的な魅力発信も行っている。さらに、県民の健康促進を目的とした滋賀県の取組「健康しが」と連携するなど、エリアや部局を超えて、新たな誘客・ブランド価値向上に取組んでいる。

<おわりに>

① 東京でのサイクルツーリズムの可能性

東京には「琵琶湖一周」や「しまなみ」といった自然を活かした大規模なコンテンツはありませんが、サイクリストにとっては「知られざる道」を開拓することも魅力です。サイクリストに選ばれるためには、単に観光地を線をつなぐだけのコースでなく、「●●花ロード」「▲▲歴史街道」といった地域の特性を活かしたテーマ性のあるコース作りが重要と考えます。また幹線道路だけでなく、裏道や小道にあるニッチな観光地に行くことが

できるのも自転車ならではの魅力です。

また、東京におけるサイクルへの親和性は高いと言えます。23区では、「シェアサイクルリング」活用により、徒歩や公共交通機関では体感できない周遊観光コースが可能になります。多摩地域では、「多摩川サイクリングロード」の活用や「東京オリンピック ロードレース大会」を契機とした新たなコース作りなど、自転車ファンから注目されるコース設定が可能です。また島嶼エリアでは島特有の「海に見える景観」「一周」だけでなく、上級者に好まれる「高低差のある道」「山・森の中を走る道」なども魅力です。

サイクリスト初心者から上級者までの幅広い層に対し、コンテンツを上手く生かすことで、東京のサイクルツーリズムの可能性は大きいのではと考えます。

② 持続可能なサイクルツーリズムとするには

サイクルツーリズムの成功のためには、コース作りとともに、サイクリストの受け入れ環境が重要です。自転車が安全に走行できる道路の整備のほか、サイクリストが「また訪れたい」と思うおもてなしができるよう「講習会」などに取組むなど、住民がまちづくりの一つの視点として自転車を捉えること必要です。また、サイクリストの満足度向上のため、地元民間企業や地域住民との連携により、「その土地でしかできないこと・買えないもの」「緊急時のトラブル対応体制の確保」といった仕組みをサイクリスト目線で創り出すこともポイントです。

行政・観光団体・商工団体・民間企業・住民が一体となって、環境にも健康にも優しいサイクルツーリズムが各地で普及し、地域の活性化や人々の豊かな生活に寄与していくことを願っています。



①自転車専用レーン



② サイクルサポートステーション
(ジャイアントストアびわ湖守山)



③サイクルパーツ自動販売機
(自転車処どてるし)

【取材協力先】

- 輪の国びわ湖推進協議会

<https://www.biwako1.jp>

- 滋賀プラス・サイクル推進協議会（滋賀県商工観光労働部 観光振興局 ビワイチ推進室内）

<https://pluscycle.shiga.jp>

〈参考書籍〉

『サイクルツーリズムの進め方 自転車で作る豊かな地域』（学芸出版社）

『ちずたび びわ湖一周自転車 BOOK』（西日本出版社）